

世界から見れば、 歴史から見れば

～食・農・暮らし・協同の本質との出会い～

よみがえ

現代に甦れ！

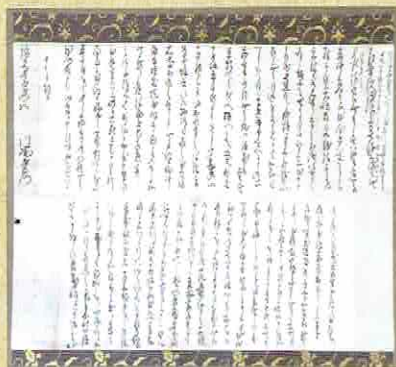
川崎平右衛門

蔦谷栄一（農的社会デザイン研究所 代表）

「いいか、力がある者は力を出せ。知恵がある者は知恵を出せ。心優しい者はみんなにやさしくしてやれ」と諭し、農民の協同の力を引き出すことによって、武蔵野台地での新田開発を成し遂げた川崎平右衛門——知られざるわが国の協同の源流をさかのぼります。



▶川崎平右衛門書状（錦見長太夫宛）



川崎平右衛門定孝肖像画（複製） 府中市郷土の森博物館蔵

協同組合正史

1900年（明治33年）の産業組合法の成立によって、我が国における協同組合の歴史の扉は開かれたとされる。この産業組合法の成立に大きくかかわったのが品川弥二郎であり平田東助であることはよく知られている。

産業組合法成立までには曲折があり、1891年に内務省によって「信用組合法」案が帝国議会に上程されたものの、衆議院が解散となり、貴族院も停会となったことから審議未了で廃案となった。この時、品川は内務大臣、平田は法制局局長であった。二人がドイツ留学中に見聞したシュルツェ系信

用組合をモデルに信用組合法を立案したものである。

これについての帝国議会における論戦と併行して展開されたのが農商務省と農学会による反論であった。ドイツのシュルツェ系信用組合は、①組合区域を制限しない、②短期融資を原則とする、③役員には俸給・賞与を与える、等を原則とする。これに対してライファイゼン系は、①一人二個以上の組合への加入禁止、②持ち分制を排し、利益配当はしない、③貸付金は長期貸付とする、④貸付は対人信用とし、徳を養うことを目的とする、⑤会計を除く役員を無給制とする、等を原則とする。農村振興を主眼にすれば都市信用組

合型のシュルツェ系信用組合は不適切であり、ライファイゼン系であるべきとした。

1897年に、あらためて農商務省から、シュルツェ系の原則に忠実だった信用組合法案に、ライファイゼン系の原則をも織り込んだ「産業組合法」案が上程された。この法案も審議未了によって不成立となったが、その後も粘り強く活動が積み重ねられたことにより、1900年2月に第一次とほぼ同じ内容とされる第二次産業組合法案が上程され、貴族院を通過、成立したのであった。

いずれにしても日本における協同組合はドイツをモデルに成立した。そのドイツはイギリスに遅れ



現代に甦れ！ 川崎平右衛門

て産業革命が進展しており、イギリスを参考に協同組合は構想された。その意味では我が国の協同組合の源流はイギリスのロッチデール公正開拓者組合にあるともいえる。

日本協同組合運動の祖

ところで1900年の産業組合法成立以前の1884年に茶業組合準則、85年には蚕糸業組合準則が設けられている。さらに組合製糸の始まりは1877年とされ、またその前後に各地で報徳社が結成されている。

このように産業組合法成立以前から我が国でも協同組合的活動は必要に応じて展開されてきており、ロッチデール公正開拓者組合を源流とする流れとは別に、日本独自の流れが存在し、この流れの上に産業組合法によってヨーロッパ流の協同組合運動が合流・接ぎ木されて発展し、世界でも最大の協同組合国とされる現在の興隆がもたらされたと見ることができる。

この日本独自の協同組合運動の祖としてあげられるのが二宮尊徳であり大原幽学である。二宮尊徳(1787~1856年)については、あらためて紹介するまでもないが、相模国足柄上郡栢山(現在の小田原市栢山)の出身で、至誠・勤労・分度・推譲の四綱領を基本に、小田原藩家老服部家をはじめとする財政改革や農村復興運動を指揮した人であり、日本最初のコンサルタントとも言われる。その弟子である岡田佐平治が遠江国報徳社を設立したのを手始めに、道徳と

経済の調和を中心とする協同的結社「報徳社」が各地に広まり、これが日本における協同組合の先駆的組織であるとされる。

また大原幽学(1797~1858年)は尾張藩の生まれであるが、各地での流浪を経て、房総長部村に招かれ、やはり道徳と経済の調和を

基本とする性学^{せいがく}を説き実践に取り組んだ。「先祖株組合」をつくって、村民は所有地の一部を提供し、これから上がる収益で困窮者の支援、土地改良、農地開拓をすすめるなど、農民が協力し合って自活できるよう促すことによって農村振興の成果をあげた。

○川崎平右衛門年表

※年齢は満年齢で表記

西 暦	和 暦	年 齢	事 項
1694年	元禄7年	0歳	平右衛門 生まれる 幼名は辰之助(たつのすけ)
1703年	元禄16年	9歳	元禄大地震
1707年	宝永4年	13歳	宝永大地震 富士山大噴火
1716年	正徳6年	22歳	徳川吉宗 8代将軍に就任
1717年	享保2年	23歳	大岡忠相 江戸町奉行に就任
1720年	享保5年	26歳	江戸町火消いは四十七組創設
1721年	享保6年	27歳	評定所前に目安箱設置
1722年	享保7年	28歳	大岡忠相 地方御用開始 日本橋に新田開発奨励の高札が立つ 小石川療養所設置
1723年	享保8年	29歳	平右衛門の父が亡くなり家督を継ぐ。押立村名主になる。
1729年	享保14年	35歳	吉宗ベトナムから象を輸入する
1732年	享保17年	38歳	平右衛門 淀橋で象洞販売
1733年	享保18年	39歳	平右衛門 本所回向院で象拜借見世物願
1737年	元文2年	43歳	武蔵野新田場内に栗林仕立
1738年	元文3年	44歳	武蔵野新田場内に竹林仕立
1739年	元文4年	45歳	栗林・竹林仕立、百姓救助により、褒美として銀子10枚、 苗字帯刀を許される。「川崎平右衛門定孝」 南北武蔵野新田場世話役となる。
1740年	元文5年	46歳	武蔵野新田賞付利金(畑養料)貸付 武蔵野新田の儀、平右衛門の「心一盃」にさせる！ 玉川上水の普請を指揮 平右衛門と名主29名に褒美
1741年	寛保元年	47歳	芝地開発料実施
1742年	寛保2年	48歳	多摩川大出水後、百姓御救いのため、平右衛門を下総、武蔵など 4国を廻村させようとするが、病気のため実現せず。
1743年	寛保3年	49歳	多摩川御普請指揮4,000両で完了 褒美銀10枚 支配勘定格に品替3万石支配 10人扶持を 30人扶持へ
1749年	寛延2年	55歳	美濃国本田代官となる
1754年	宝暦4年	60歳	御目見以上仰せつけられる。30人扶持を 150俵取に改め
1762年	宝暦12年	68歳	石見国大森代官となる
1767年	明和4年	73歳	平右衛門 亡くなる

「川崎平右衛門「心一盃」より



注目したい川崎平右衛門

ここで取り上げておきたいのが川崎平右衛門（1694～1767年）である。平右衛門は二宮尊徳等より約100年前、江戸時代中期に活躍した人で、武蔵野国多摩郡押立村（現在の府中市押立）の名主であったが、農民の協同の力を引き出すことによって武蔵野台地での新田開発を成し遂げた。

すなわち1707年に先の東日本大震災に匹敵する宝永大地震が発生し、これに続いて富士山が大噴火した。飢饉の続発と復興事業にともなう幕藩財政の悪化から、8代將軍・徳川吉宗によって享保の改革への取組みが開始された。この総責任者を務めたのが大岡越前守忠相で、その目玉が武蔵野台地での新田開発であった。開発は遅々としてすすまなかったことから、「世襲の役人に代えて、現場で復興事業に取り組んでいる農民・町人の中から優れた人材を抜擢」として武蔵野新田世話役に任命されたのが川崎平右衛門である。

もともと作物の栽培には適さない武蔵野台地を改良していくには、大量の肥料が必要であったが、百姓たちは貧しく肥料を購入することはかなわず、幕府も財政難で肥料代を補助することは困難であった。平右衛門は、農閑期には肥料が半値にまで下落することに目をつけ、この時を見計らって大量に肥料を買い付ける。一方で収穫物は商人の手に任せず、直接買い上げてやることによって有利販売する。このようにして肥料は半値で

貸し渡し、収穫物は2割高で買い取り、貸し付けた肥料代は収穫物で返済させる。このための資金は、幕府から公金を借り入れ、これを商人たちに貸し出すことによって、元金には実質手を付けることなく、商人たちから得た利息をこれに充当する、ことを考案・実現した。また、備蓄等をすすめる養い料組合の設立、畑を開きながらも作物が取れないために逃げ出した農家が戻ってきた際の立ち帰り料の支給、飢饉に備えての稗蔵ひえぐらの設置等に取り組んだ。

こうした取組みと併行して、見ず知らずの人間が集まって作られた新田の村であるからこそ、村人たちは助け合い、百姓たちの話し合いによって自主的に物事を判断して進めることができるよう、百姓自身が協力し合う百姓組合ともいうべき取組みを重視した。その他の手法も含めて、平右衛門は助け合う心、協同の精神を尊重し、百姓たちの力を引き出すことによって、新田開発を成功に導いたのであった。

平右衛門はその後、本田代官おんじやうとなって輪中わななで知られる美濃三川の治水工事にあたり、さらに大森代官おほのみとなって石見銀山の再建に当たっている。いずれの地にも平右衛門の功績と人徳をたたえて、いくつもの石碑等が立てられている。

武蔵野の歌が聞こえる

筆者が川崎平右衛門を知るきっかけとなったのは、東京都小金井市にある劇団・現代座による合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』

の上演に向けた市民グループの支援活動への参画である。『武蔵野の歌が聞こえる』は木村快氏の脚本・演出によるが、同じ地域に住む市民から「地元の話芝居にしてほしい」との要望があり、そこで提起されたのが「川崎平右衛門」であった。市民とプロジェクトを組み、川崎平右衛門や江戸の歴史等について4年にわたって勉強会を重ねて脚本は作られた。勉強会を始めた翌年には東日本大震災が発生している。木村氏は「実は、江戸幕府が不毛の大地と言われた武蔵野台地に82カ村に及ぶ大新田を開発する必要があったのは、宝永4年の東南海トラフ大地震で歴史上最大の災害が起こり、農業を復興しなければならなかったからでした。しかし、それに先立つ元禄時代はバブル景気であつた、幕府の財政は破綻しかかっていました。現代と同じことが起こっていたのです」と語る。そして東日本大震災の復興や財政再建のためにもろもろの対策が講じられてきてはいるが、最も欠けており、今、最も必要とされるものこそが「協同の心」「協同の取組み」であると看破して脚本は書き進められた。

劇中、心打たれる場面はいくつもあるが、平右衛門が新田世話役に任命されてはじめてした、不足する水を確保するための村民による井戸掘りの話とその一つ。井戸掘りに際して「皆の衆、これから村で必要なことは江戸の商人に頼まないで、自分たちでやることにしよう」と述べ、節約と自給を呼びかける。「いいか、力がある



左／(左から) 木村快、大石学、永戸祐三の各氏による第1回研究会シンポジウム。参加者とも熱心な質疑応答がなされた(写真提供/協同総合研究所 相良孝雄) 右/府中市郷土の森にある川崎平右衛門の銅像前で、第1回研究会の参加者

者は力を出せ。知恵がある者は知恵を出せ。心優しい者はみんなにやさしくしてやれ」と諭すとともに、食べ物に事欠く村民に労働量に応じるだけでなく、老人や子供にも一定量の麦を分配する。こうして井戸の掘削を実現させた平右衛門のやり方を見て大岡忠相は「なるほど、同じ百姓でも上から命じられたときの百姓と、おのれがやろうとするときの百姓では力の出し方は何倍も違うのだな」と合点し、「新田開発の儀、平右衛門の心一盃にすすめることを許す」と高らかに宣言する。まさに劇場という空間が加速させて、平右衛門の思いを全身全霊を持って受け止めるべく迫ってくる。

川崎平右衛門顕彰会・研究会の発足

『武蔵野の歌が聞こえる』の初演は2014年であるが、15年、16年と市民グループによる支援活動によって現代座での公演は続けられた。この間、JA東京中央会、JA東京むさし、日本労働者協同組合をはじめとして、たくさんの協同組合関係者にも見ていただいた。

そうした中から、この川崎平右衛門があまりにも知られないでいる、もっともっと広く世に知らしめ

るべきと考える人たちが集まり始め、ついに2017年5月には川崎平右衛門顕彰会・研究会を発足させた。川崎平右衛門を世に広く知らしめていくとともに、協同による取組みについての関心を高め協同活動を活性化させていくことを目的とし、川崎平右衛門に敬意を抱き慕う全国の人たちを会員として、川崎平右衛門及びこれに関係する協同活動に^{ちか}因む各種イベントの企画・開催・応援、研究会の開催、各地の川崎平右衛門顕彰団体等との交流などを行っていくことをねらいとする。役員体制は会長・山田俊男(参議院議員)、副会長(川崎平右衛門研究会会長)・大石学(東京学芸大学副学長・教授)、副会長・須藤正敏(JA東京中央会会長)、同・永戸祐三(日本労働者協同組合連合会名誉顧問)、同・岩倉秀夫(府中市史談会副会長・会長代行)、常任委員(事務局局長)・蔦谷栄一同(企画広報委員長)・木谷道宣(木谷ウオーキング研究所代表)、等でスタートしている(年会費3,000円〈法人3万円〉。申込み・問い合わせは川崎平右衛門顕彰会・研究会事務局〈東京都小金井市緑町5-13-24、特定非営利法人・現代座内〉まで。TEL:080-5895-3960)。

日本人の血に流れる協同の心

川崎平右衛門との出会いは、こうした知られざる偉人が各地に存在したのではないかも推測させる。さらにはこうした偉人が生み出され、これを理解し支持するたくさんの人たちの存在とともに、古くから日本人の血には協同の精神が脈々と流れてきたことをもうかがわせる。我が国の協同運動の歴史をさらに^{さかのぼ}遡って考えていくことが、これからの協同運動を進めていく大きな力になり得ることを、平右衛門との出会いは教えてくれる。

<参考文献>

- 阿部信彦編著(2000)『協同組合「100年の軌跡」——ふり向けば産業組合』協同組合懇話会
- 日本農業新聞編(2017)『協同組合の源流と未来——相互扶助の精神を継ぐ』岩波書店
- 渡辺紀彦(1988)『代官川崎平右衛門の事績』井上彬
- 木村快(2014)『武蔵野の歌が聞こえる』NPO現代座

つたや・えいいち

農的社會デザイン研究所 代表
1948年生まれ。71年農林中央金庫勤務。(株)農林中金総合研究所・常務取締役、特別理事を経て2013年11月から現職。主な著書は『農的社會をひらく』『共生と提携のコミュニティ農業へ』『都市農業を守る』『日本農業のグランドデザイン』等。